

復興支援フォーラムニュース No. 44

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先 今野順夫 (tkonno67@gmail.com) 中井勝己 (024-548-8313) >

7月4日に開催した第41回ふくしま復興支援フォーラム(武内敏英氏「大熊町における学校再生の挑戦」)は、約40名の参加で活発な議論がなされましたが、会場で提出されたご意見等は、以下の通りです。参考にしてください。

★学校再開の迅速さには、大変素晴らしいことであったと思います。2年以上が経ち、学校に求めることが変化していくのは、ある種当然のことであると思います。今後も住民の声を聞き、柔軟な学校運営を推進して下さい。(N.S)

★大変な苦勞をされて学校を立ち上げたことに感銘しました。(T.O)

★避難生活の中で、真剣に子供の教育を考え、子供達の将来を考えた改善等を実践されている姿に感動しました。とくに、主体的活動のできる環境を整備するという取組みについて・・・(K.F)

★原発立地自治体は、すぐ避難させてもらえてよかったが、そうでない浪江や飯舘、山木屋は避難しなさいもなく、外で遊んでいいといわれていた。ひどい話です。結局、県北に避難した人が多く、放射線量が少し低くなったのみですね。早く動いていたらもう少しと思えます。こんな事故が起きても、学力向上至上主義が抜けないです。そういう教育を受けた人が先生になっていく。中高一貫で次の大学入試が親は気になるが、そうではないことを説明しないとダメと思う。武内先生の考えが伝わるといいと思う。震災前の教育から変わらなければまた同じことが起こる。学校は地域の要になることがよくわかった。会津なので早く再開してよかったと思う。県北は、学校をはじめれば、避難している生徒を呼び戻すことになり、悩んだ。たくさんの子供がいなくなったが、まだ300人以上もの子どもたちがいる。その子たちのために、がんばって、新しい(本来の)教育を追い続けて欲しい。(Y.S)

★厳しい現実の中で、希望の光は今後の課題として提示された双葉郡全体の学校、それを“とてつもなく素晴らしい学校にする”ことと思えた。(Y.T)

★武内さん始め。3.11以来、大変な2年間を送られた事に頭の下がる思いであります。大変貴重なお話をいただきましたが、個別の自治体の努力や苦勞に転嫁させられている所が余りにも多く、そのことに心が痛む。何とかしなくてはと、ジリジリするばかりです。(S.K)

★学校再生への「挑戦」。挑戦の対象は、県教委の学力向上路線や、教育の費用対効果論への挑戦だと思う。そこをわたしたちも「意識化」しないとダメだと思う。(N.S)

★厳しい状況の中での学校創り、教育推進に感銘を受けました。(Y.S)

★冷静で落ち着いていて、しかもユーモアもまじえた語り口で難局を乗り越えてこられたことをご報告いただいた。一人一人の子ども達のことを思いやると、無数の課題や問題状況が浮かび上がってきて、いろいろ考えさせられた。素晴らしい教育長さんとの印象を強くした。(S.I)

★教育が地域を基盤にして存立しているのだということに、思いをあらたにしました。今後の展望を見出すのは、大変困難な事業だとキモに命じました。ありがとうございました。(S.M)

★上の人の決断と信念があったからこそ、出来たと思います。「教育は自分たちで作っていく」との発言は、改めて大事なことと感じました。(Y. I)

★今は双葉8町村の、各町村の足並みはバラバラですが、教育、行政含め、一つにまとまっていかなければ、やっていけなくなりますね。今までの事はよしとして、5年後、10年後を考えて策を練ることも必要かと思います。(T. H)

★早期の学校再開は、子どもたちにとって本当に力になったと思います。学校の役割を改めて考えさせられました。町に戻れない中での、今後の教育・学校の在り方は難しいと思いますが、大人の理念だけでなく、子どもにとって何が良いのかを大人は考えなければならないと思いました。(M. K)

★本当に異常な大変な状況の中で、非常に早期に学校を立ち上げたことに感服しました。それには武内先生の教育理念の深さと強さがあったのだと思います。先をみられての教育を是非生かせるようになることを願います。(T)

★大熊町が、震災直後10日も経たないうちに、学校を立ち上げの動きを始めていたことに驚きました。その努力は大変なものであると思います。一方、長期的な見込みが、なかなか立てられない中で、子どもへの教育活動をどうつくっていくかは、非常に難しい問題だと思います。しかし、考えて、自分で行動できる子供を育てるという活動に共感しました。今後、県内で色々の面からサポートしていける体制がとれればと思います。(S. T)

★とてもリアリティを伝えていただけのお話でよかったです。①学校が大熊町のコミュニティを維持する機能をもったこと、そこに武内先生が尽力されていること、こだわっているところが印象に残りました。学校があることで、家族単位で暮らすきっかけになっているのかと思いました。②子どもの減少とともに、町の未来が見えにくい、という話がグサッと刺さりました。自分にできることが思いつかないのですが、これからも気にとめて見ていきたいと思っています。ありがとうございました。(K. K)

★教育について、改めて考えさせられた。コミュニティの問題と一緒に考えないといけないと思いました。勉強になりました。(A. O)

★コミュニティにおける学校の重要性がよく分かった。

☆希望するテーマ等

- *放射能被曝に対する継続的健康管理体制
- *100ベクレル/kgの食品基準で安全か。ウクライナでは1.1ベクレル/kg食事で、健康被害が出ている。食べて応援、福島産は安全という宣伝が強く、食べ物が心配といいにくくなっている。
- *社会起業について(以前やられたとは思いますが)
- *原発事故放射能汚染と自然動植物(県農業試験場の方)

=====

【予告】

第43回ふくしま復興支援フォーラム」(2013年8月8日(木) 18時30分～)

テーマ 「飯舘村の現状と課題」

報告者 菅野典雄氏(飯舘村長)

会場 福島市 市民活動サポートセンター

A会議室 チェンバおおまち3F(福島市大町4-15)

=====

「ジャーナリストから見た震災復興の課題」

藍原寛子（ジャーナリスト）

会場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」

大活動室1（MAX ふくしま4F／福島市曾根田町1-18）

1. 自己紹介

2. 震災、原発事故発生と情報の新しい流れ

- インターネットなど情報伝送路の多様化、多チャンネル化（地デジ化）での震災発生
- SNS、スマホで大量の情報→「あふれる情報は市民を混乱させるだけ。有害無益」なのか
- 一方で原発事故後に凋落した日本の報道自由度（国境なき記者団 22位→53位）

3. マスメディアに乗らない情報一起きている事実をありのままに知ることの困難さ

- 郡山市の朝鮮初中級学校の避難、漂流したシニアガーデン、認可外保育所でのボランティア除染—社会的弱者の震災[動画]
- 大熊町はいま[動画]—伝えられない被災地の現状、県外・国外避難者の実態
- 学び、議論することから、さらに情報を発信し始めた市民—勃興するマイクロ・メディア
- 従前は「ニュースにならない」「絵にならない」とされた内容を分析し、組み立てる構成力と企画力

4. 「メディア」「専門家」「科学者」への不信はどこから

- 利益相反 Conflict of Interests→調査費、研究費、給与、その他手当など金銭的なつながりが示されない→説明・明示・報告義務なし—自由な研究、経済活動と国民の知る権利
- 多様なセクター、専門外の人々の多様な発言—縦割りの専門家（放射線治療、放射性毒性学、被ばく医療、分子生物学、核医学、放射性疫学、原子力工学、保健物理学、システム工学、腫瘍学…その他）
- 多様性に対応できないひずみ→震災後はより求められる

5. 「復興」をどう考えるか

- コスト／リスクーベネフィット論に立脚した福島の復興と、震災後の二つの国政選挙
- 予算や財源、観光、経済振興—「復興バブル」の影響
- 原発事故の原因分析や責任の明確化なき復興—震災便乗型事業（『ショック・ドクトリン』、例：「ゼネコン中心の除染」「六魂祭」「復興イベント」「大河ドラマ・八重の桜」「モナリザ展」「被災地観光地化計画」をどう考えるか）→”ふたつの福島”
- 自治体政策—「予算獲得」は震災後もアウトカム指標となりうるか

6. 世界が注視する福島の動向—福島から発せられる情報の重さと情報のグローバリゼーション

- 震災以降の海外メディアの反応
- 食品測定実施の刺激剤となった市民の取り組みと海外 NGO の活動
- 番外) フィリピン・バタアン原発と日本の原子力産業、福島のつながり [動画]
- 復興のカギを握る情報の受発信—どのようにしてより多くの情報を知り、学び、伝え、残していくか

7. その他

(了)